

2. GS 進学支援プロジェクトについて

2. GS 進学支援プロジェクトについて

(1)進学支援プロジェクトとは

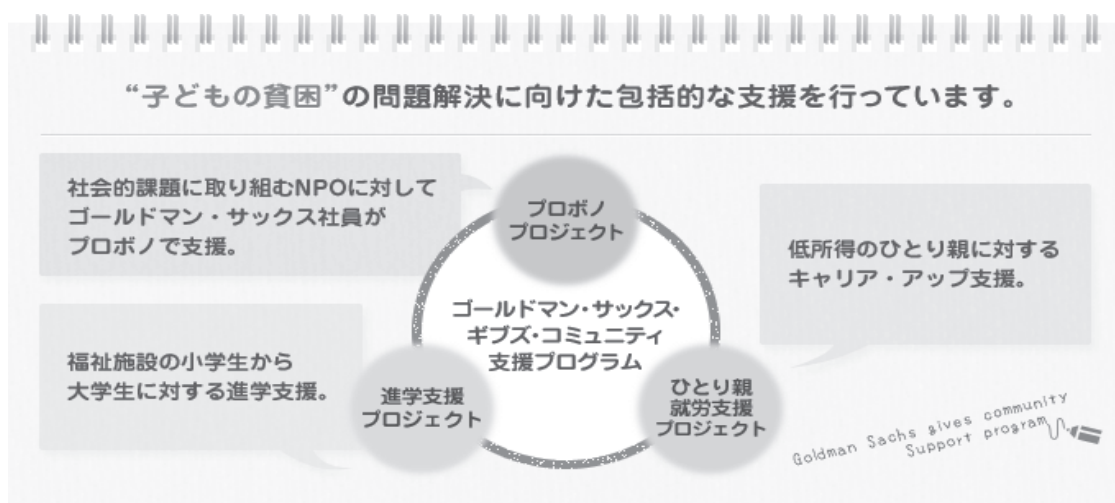
■そもそもの始まりと目指したこと

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会が運営する東京ボランティア・市民活動センターは世界的な金融機関であるゴールドマン・サックス社(以下、GS 社)と協働し、2010年9月に『ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラム』をスタートしました。本事業は日本の子どもたちの貧困問題(貧困の連鎖)を解決するために、『進学支援プロジェクト』、『ひとり親就労支援プロジェクト』、『プロボノ・プロジェクト』の3つのプロジェクトから構成されています。

本事業のそもそもの始まりは、都内の児童福祉施設でボランティア活動をしていた GS 社員の方々が、この子どもたちの将来のためには、大学等の高等教育が必要だと気が付いたことでした。当時、児童養護施設の子どもたちが4年制大学に行くことは厳しい状況でした。給付型の奨学金の数も給付額も少なく、授業料や生活費をアルバイトで賄わなければならない、授業にも出られない、ましてや、サークル活動などは無理。授業だけではなかなか友だちもできず、また、施設出身であることを周りに伝えることもできずに孤立し、中退する学生が少なくありませんでした。

そこで、施設の子どもたちが、4年制大学に通い、卒業できるように奨学金と人の支援を提供する『進学支援プロジェクト』を開始しました。また、「母子家庭の半数が相対的貧困状況にある」ということから、子どもの進学のために、母親の就労支援にも、プロのキャリア・アドバイザーにご協力いただきながら取り組みました。さらに、こうした子どもたちや母親を支援している施設や NPO に対して、その組織強化を目的とし、NPO 法人(現在の認定 NPO 法人)サービスグラントとの共催で、GS 社員がボランティアとして団体の戦略構築や計画策定を支援し、それを実行に移す際の資金援助も行う『プロボノ・プロジェクト』も立ち上げることになったのです。

こうした3つのプロジェクトを実施するにあたり、施設関係者へのヒヤリングを何度も行い、GS 社と戦略を作りながら、協力いただける NPO を探しました。



■段階的なアプローチでの大学への進学支援

この『進学支援プロジェクト』は、東京都の児童養護施設のみでなく、自立援助ホーム、母子生活支援施設、児童自立支援施設の4種類の児童福祉施設の子どもたちを対象とし、①大学進学支援事業、②高校生支援事業、③中学生支援事業、④小学生支援事業という4つの事業でスタートしました。それぞれの事業には GS 社の役員・社員が参加し、多彩な NPO と協働しています。

■奨学金と伴走支援(大学進学支援事業)

まず、大学進学支援事業ですが、対象は都内の児童福祉施設の子どもたちから、書類および面接で選考された3名に対して、「行きたい大学」の授業料全額と大学受験にかかる通塾代や受験料、入学金、学用品、通学費、転居費を給付するとともに、生活費として月額8万円程度を支給し、アルバイトをある程度すれば、授業にも出て、サークル活動もできるような経済的状況を保障しました。この奨学金は奨学生と施設とで契約し、施設に管理していただきました。また、奨学生が孤立したり、困ったときに相談できるようにと、出身施設の職員の方に月1回面接していただくとともに、本センターのケースワーカーも月1回面接しながら、「両輪で」奨学生に伴走しました。

このような手厚い支援体制の中で、奨学生たちは授業に出て、必要な資格を取り、サークル活動やアルバイトなどをして、充実した大学生活を送りました。しかし、「思っていた大学と違う」「学力が足りない」「朝起きられない」「お金の管理ができない」「周りの学生となじめない」「サークルをしすぎた」「バイトが断れない」など、さまざまな課題を抱える学生もいました。そして、そのことを職員にもケースワーカーにも話さず(話せず)、順調であると言いながら、問題が悪化していったケースもありました。施設で「手のかからないよい子」は、施設に相談しにくいこともあるようです。大変な時は施設長や施設の心理職、ボランティアにも協力していただき、全施設でサポートしたことも度々ありました。こうしたケースワーカーの経験をまとめたもの(67～68ページ参照)と奨学生や施設職員のインタビュー(54～66ページ参照)も掲載していますので、ご参照ください。

■GS 役員・社員との顔の見える関係づくり

また、大学や高校の奨学生には、夏休みを利用してゴールドマン・サックス社を訪問し、公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本(53ページ参照)にご協力いただいて、役員・社員さんたちとの面談(キャリア・メンタリング)や交流も行われました。また、年度末にも GS 社を訪れ、本事業を担当する役員・社員の方々にその年度の大学生活の報告をしたり、卒業生を祝う会も行い、スポンサーとの「顔の見える関係」を作るようにしました。

奨学生たちが就職活動につまずいている場合は、NPO 法人フェアスタートサポート(94ページ参照)に面談や適性検査をして、サポートしていただきました。

施設の担当職員とケースワーカーも奨学生の情報を常に共有していますが、年に2回、対面またはオンラインで担当職員の皆さんが集まり、それぞれの経験から学ぶ場を用意しました。また、奨学生同士の交流の場も開催しています。

■大学に入るための塾代給付と相談支援(高校生支援事業)

4年制大学に入るためには多くの学生が塾などに通っていますが、当時、児童養護施設の子どもたちの塾代支援がありませんでした。そこで、高校2年生(6名)と高校3年生(6名)の通塾代や夏期・冬期講習の経費を給付するとともに、ケースワーカーが大学生になってから関わるのではなく、高校生

の時から奨学生と月1回の面談を実施しました。必要であれば、塾を経営している企業の社員ボランティアにアドバイスをいただきました。

学生が本プロジェクトの申請書に記載する進学希望の大学は有名なところが多いのですが、その大学のことについてよく調べていなかったり、確実に受かるために別の大学に推薦で入る学生もいました。そして、大学に入ってから後悔すること。そこで、ケースワーカーもつきそいながら、受験前に大学訪問をしたり、自分でよく考えて大学を選ぶことを奨学生と施設職員に伝えました。

■大学に関心を持ち、進学校へ(中学生支援事業)

大学に進学するためには進学校である高校を選ぶことが重要となります。そこで、NPO 法人キッズドア(現在は認定 NPO 法人、53ページ参照)の大学生ボランティア・チームが、施設に月 2 回、6 か月間(全12回)訪問して、学ぶことの楽しさや大学の魅力を伝えてくれました。こうした大学生たちが中学生のロールモデルになったようです。

施設職員の皆さんも、子どもたちが学習会に参加するように上手に誘導しながら、子どもたちが継続できるようにサポートしていただきました。

■学校が好きになるためのワークショップ(小学生支援事業)

また、施設の方々へのヒヤリングの中から、小学生が高学年になると、「学校に行きたくない」という子どもたちや言動が荒れてくる子どもたちがいることがわかりました。原因としては、自分の気持ちを言葉にして友だちや先生に伝えることができないことが考えられるため、NPO 法人 JAM ネットワーク(53ページ参照)に協力していただき、子ども向けのコミュニケーション・ワークショップ『ことばキャンプ』を半年に全6回開催し、施設職員にもオブザーバーとして参加していただきました。そして、職員を対象とした『ことばキャンプ』についての説明や成果を共有する『職員セミナー』も全3回実施しました。職員も対象としたのは、講師がどのように子どもたちとのコミュニケーションをとっているかを見てもらい、それを、他の子どもたちにも職員が伝えてもらえるという狙いがあったからです。

子どもたちは、自分の言うことを「待ってくれる」「受け止めてくれる」大人に対して、言葉で伝えることを学びました。

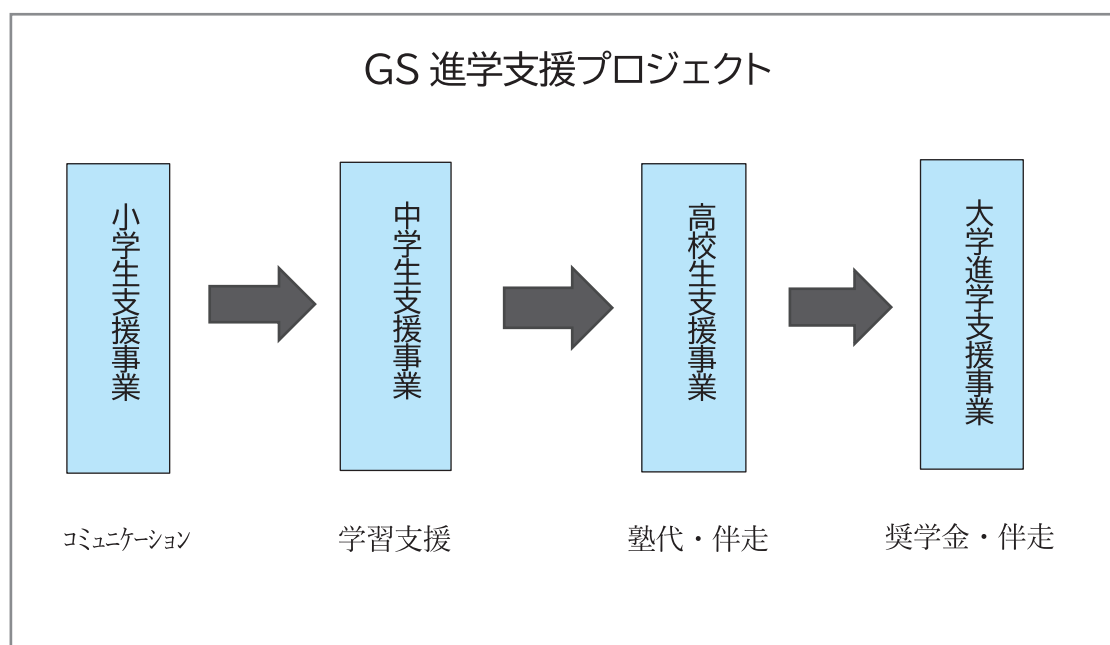
■事業の評価と社会的関心の広がり

『進学支援プロジェクト』と『ひとり親就労支援プロジェクト』には、GS 社の役員・社員、児童福祉施設の施設長・職員、NPO 法人などからなるアドバイザリー委員会が年に2回開催され、NPO 法人 ETIC.(エティック)(53ページ参照)による第3者的な事業評価が報告され、多様な立場での協議やアドバイスをいただき、事業を展開していきました。

『進学支援プロジェクト』については、第1期～第12期までの間に、東京都が委託する64の児童養護施設のうち34施設(53%)が大・高・中・小いずれかのプログラムに参加しました。また、6つの母子生活支援施設と1つの自立援助ホームを支援しています。延べ688名の児童と延べ174名の施設職員が本プロジェクトに参加したことになります。

当時、「日本の子どもの6人に1人が相対的貧困の状況にある」ということが大きな社会的関心を集め、本プロジェクトについて、厚生労働省、文部科学省、自治体、大学、助成財団、NPO、メディアなどからヒヤリングや取材がありました。そして、多様な奨学金や支援が広がっていくことになります。そして、2020年には本プロジェクトとほぼ同様の内容の奨学金制度を国がスタートすることになり

ました。また、翌年には「人による伴走支援」ということで、自立支援担当職員の配置が児童養護施設のみならず、母子生活支援施設、自立援助ホーム、児童家庭支援センターでの設置が可能となりました。



GS『進学支援プロジェクト』の参加者・施設数

事業名	参加した施設数	参加者数
大学進学支援事業	24 施設	児童:33 名
高校生支援事業	17 施設	児童:73 名
中学生支援事業	16 施設	児童:355 名
小学生支援事業	23 施設	児童:229 名/職員:174 名

■コロナ禍の退所生と施設をつなぐ『アウトリーチ・プロジェクト』

こうした中、2020年4月から新型コロナウイルス感染症が日本を襲い、学生たちが大学にも行けずに孤立し、アルバイトもできないためにお金がないという状況になりました。そこで、GS社とNPO 法人 NPO STARS と相談し、全国の児童養護施設から退所生に食料や消毒用品、マスクなどを、手紙をつけて送るという『アウトリーチ・プロジェクト』を実施することにしました。187カ所の施設にご参加いただき、2,509人の退所生が施設とつながることができました。その際に退所生に簡単なアンケートに協力していただきました。1,871人の退所生が回答し、そこには、困窮している様子やSO Sが出せずに孤立していることが書かれていました。

特に、困窮している退所生には、施設の方に状況を把握していただき、上限10万円の緊急支援金を給付しました。

本プロジェクトについての報告書には、すべてのアンケートを掲載し、何名かの施設職員の方や退所生の方にオンライン・ヒヤリングもさせていただき、法政大学の岩田美香教授に分析と提言をお願いしました。そこで、提言されたのが、退所生への積極的なアフターケアと退所生がSOSを出しやすいようにインケアからの関係構築でした。

『アウトリーチ・プロジェクト』の報告書⇒



■そして、『全国若者自立支援プロジェクト』の実施

前述したように、私たちが実施してきた『進学支援プロジェクト』とほぼ同様の内容の奨学プログラムを国がスタートしたことから、本プロジェクトのパイロット・プロジェクトとしての役割は終了したことになります。そこで、再び、GS社とNPO STARSと相談し、十分な奨学金があり、自立支援担当職員も配置されたが、児童福祉施設出身の大学生の中退が比較的多いことや、自立支援担当職員の配置やその取り組みに施設間格差や地域格差があることが課題となっていることがわかりました。

そこで、まずは、各種児童福祉施設が全国および8つのブロックでつながるためのオンライン会議を開催し、翌年には、それぞれのブロックにおいて、児童福祉施設のみではなく、子どもたちを支援している団体や企業、社会福祉協議会、自治体などの関係団体・者にも参加してもらい、ネットワークをつくる対面の会議を開催しました。この報告書では、その協議の内容や成果・課題、そして、今後の可能性について、ご協力いただいたNPO STARSの運営委員や全国各地の児童福祉関係の企画委員に記述していただいています。

■子どもたちの自己実現を支え続ける

東京ボランティア・市民活動センターでは15年間にわたり、GS社の多大なるご支援をいただき、多くの児童福祉施設やNPOと協働しながら、社会的養護が必要な子どもたちの進学や就労、生活を支えようとしてきました。その子どもたちは今、さまざまな仕事をしていて、結婚して親になった人もいます。また、大学や仕事があわず、次のステップを模索している人もいます。今後も、子どもたちがその人らしく生きていけることを関係者と一緒に応援していきます。

ゴールドマン・サックス・ギブズ・コミュニティ支援プログラム
『進学支援プロジェクト』の協力団体リスト

■ゴールドマン・サックス・コミュニティ支援プログラム 「子どもの貧困」を防止するために、進学支援プロジェクト、ひとり親就労支援プロジェクト、プロボノ・プロジェクトの3プロジェクトから構成される。	
■認定 NPO 法人 サービスグラント プロボノ・プロジェクトでは、GS 社員がボランティアとして参加しながら、子どもやひとり親を支援する施設・団体の組織強化に取り組んだ。	
■公益社団法人 ジュニア・アチーブメント日本 進学支援プロジェクトで、大学生や高校生が GS 社員と面談や交流をするキャリア・メンタリングを実施。	
■認定 NPO 法人 キッズドア 進学支援プロジェクトの中学生支援事業で、大学生ボランティア・チームが子どもたちに学習支援をするとともに、大学の魅力を伝えた。	
■NPO 法人 JAM ネットワーク 進学支援プロジェクトの小学生支援事業(ことばキャンプ)では、子どもたちと施設職員にコミュニケーションのワークショップを実施。	
■NPO 法人 ETIC.(エティック) 進学支援プロジェクトとひとり親就労支援プロジェクトの事業評価を実施。	

(2)関係者インタビュー

GS 進学支援プロジェクトを振り返るにあたり、プロのライターの加藤達也さんにご協力いただき、オンラインで、奨学生や施設担当職員の皆さんにインタビューさせていただきました。

1) 奨学生 A さん ～施設にいるうちに、いろいろ経験してほしい～

A さん、30代男性。児童養護施設出身。2016年3月大学卒業。『GS 進学支援プロジェクト』の奨学生として、教員を目指し、大学時代はボランティアサークルに所属し、家庭教師のアルバイトに励んだ。在学中の公立教員採用試験に落ちたが、私学で教員をしながら再度チャレンジし、公立中学校教員に。今は家庭を持ち、1 児の父でもある。

■施設では、さまざまなことを学べたと思う

私が施設にお世話になったのは、小学4年生から高校を卒業するまでの約8年間です。当時はまだルールが厳しくて反発する子もいましたし、確かに窮屈な感じはあったかもしれません。でも私には、「これが好き」「これをやりたい」と思えるものがあり、勉強も好きだったので、それほど気にはなりませんでした。

そんな施設生活を振り返ると、「ありがたい」と感じることもありました。職員さんは、日中は小さい子のお世話で大変なのに、夜には私たちのために時間を作ってくれて話を聞いてくれました。本当に大変だったと思います。

特にありがたかったのは、高校生の頃に自立の訓練をさせてもらえたことです。施設の別棟に一人暮らしを体験できる建物があり、そこでしばらく自活をするプログラムがあったのです。それこそ自分で目覚ましをかけて朝起きて、ご飯を作って、お金の管理をして、学校へ行って、という感じです。模擬的なものとはいえ一人暮らしを疑似体験したことで、自立した後も特段迷ったり窮地に陥ったりするような場面には出会いませんでした。もともと家事関連が好きで、ある程度こなしていたことも理由のひとつかもしれません。でも、間違いなく自信につながり、不安をあまり感じず自立できたことは確かです。

■目標さがしのために、いろいろ経験してほしい

私は現在、中学校教諭として働いています。毎日中学生と接しているからこそ余計に感じるかもしれませんが、子どもたちにはいろいろな経験をしてほしいと思います。これは施設にいる後輩たちだけでなく、一般家庭の子たちにもいえることです。学業だけでなく、職場見学や体験、旅行、趣味、ボランティア活動など、チャンスがあったら何にでも積極的に挑戦してほしいです。たとえ興味のないことでも、必ずそれが将来の目標づくりの助けになるからです。

特に中学3年や高校生になると、将来と向き合う機会が多くなります。進学先はどこにするか、何のためにそこへ行くのか、何を学んでどんな仕事に就きたいのかなど、誰もが向き合う課題です。施設の子たちは高校を卒業すると独り立ちをしなくてはなりません。就職する人もいれば、奨学金やアルバイトで生活しながら学校へ通う人もいます。そのときに将来の目標がないと途中で挫折しやすいと、私は思います。事実、私の仲間でも大学へ進学したのに、あるいは就職したのに、目標がなかったことから長続きせずに辞めてしまった人がいます。自分と進路とがミスマッチだったんです。朝一人で起きられずに生活が乱れて中退した人もいます。それが一般家庭であ

れば実家に戻ればよいのかもしれませんが。でも、私たちは施設に戻ることができません。だからこそ目標を持つこと、それをモチベーションにすること、あるいは好きなモノを見つけること、それに組み入れる進路を選ぶことがとても重要です。

大人たちは、そうしたミスマッチを防ぎ、挫折させないためにも、目標探しに役立つさまざまな経験を与えてほしいと思います。地元企業との交流、先輩方を招いてのお話、近所を散歩中に工場のわきを通ったら「ここでは何を作っていて、どう使われているんだよ」と教えてあげる……そうしたことでいいと思います。子どもたちの好奇心に触れるような機会を増やしてあげてほしいです。

■先輩たちの失敗談が教訓になった

施設生活で強く印象に残っているのは、先輩方の話です。私が知っている先輩から何十年も前にいた大先輩まで、職員さんが知っている先輩たちの経験を話してくれるんです。たとえば、詐欺にあった、ぼったくりにあったという話から、年金の話や契約トラブルの話、お給料の話など、お金にまつわる話がいろいろありました。大切なお金を失いたくない気持ちは誰もが持っていますが、私たちにとっては挫折や生死に直結しがちな部分です。それだけに強烈な教訓として、心に刻まれました。おかげで施設を出てから今日まで、お金の失敗を経験せずに済んでいます。先輩方の話が土台になって、堅実に暮らすことの大切さを無意識に実践してこれたからだと思います。

お盆やゴールデンウィーク中には、先輩方が来所してくださることもありました。そういうときには、直接話を聞くことができるので、施設を出てからどんな経験をしたか、大学はどうだったか、就職はどうか、会社での出来事や一般的な社会の話など、施設以外での生活に思いを馳せながら、ワクワクしながら聞いていたことを覚えています。

■今「僕は恵まれていた」と思えるのは、皆さんのおかげ

私は本当に恵まれていました。高校で尊敬できる恩師と出会い、先生のようになりたいと教師を志しました。そのときから、大学進学と卒業は夢をかなえる道筋になりました。それを支え、照らしてくれたのがゴールドマン・サックス社の奨学金です。高校3年のときに職員さんから『GS 進学支援プロジェクト』の話を聞き、申請し、奨学生になることができました。おかげで、学業もアルバイトもボランティアサークルも十分経験できました。大学生らしい生活だったと思います。もし奨学金がなかったら、生活や学費に追われて不安な日々を過ごし、大学をあきらめていたかもしれません。

また、奨学金を受給している間は職員さんや TVAC のケースワーカーが定期的に面談してくれて、困りごとはないか、生活は大丈夫かと、都度気にかけてくださいました。幸運にも、相談するような出来事はあまり起こらないまま、大学生活を終えることができました。ただ、私は担当職員さんが多忙なことをよく知っていたので、「普通に暮らせている私のために毎月時間を割いてくださることが申し訳ない」という気持ちがどうしてもありました。「きっと私より困っている人がいる、だから私ではなく、そういう人のために時間を割いてほしい」と、常に思っていました。願わくば、本当に困っている人のためにもっと動ける職員体制ができるといいなと思います。

教師として、「施設で育ったことが、子どもの理解につながるのではないか」と考えることがあります。他人から言われることもあります。でも、私の経験を活かせるということは、つらい思いをする子が出てきてしまったということです。できればそういう子は出てこないでほしい。みんな幸せに育ってほしい。でも、もし私の経験が活きる場面になったら、助けてくれる人がいること、仲

間と暮らすのはそんなに悪いものではないこと、普通の生活とほとんど変わらないことなど、自分の感じた事柄を伝えていきたいと思います。

今の私があるのは、まぎれもなく職員の皆さんや『GS 進学支援プロジェクト』の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

2024年3月24日 オンライン・インタビュー

2) 奨学生 A さんの担当職員

～個性も環境も異なる2人のケースから支援の課題を考える～

児童養護施設の自立支援担当職員。『GS 進学支援プロジェクト』の奨学生を別の時期に2人担当。自立支援担当職員として様々な子どもの自立支援に関わっている。

■A さんのケース

まずは、私が担当した本プロジェクトの奨学生2人の事例をご紹介します。最初は A さん(男性)のケース(前述)です。

A さんが入所したのは、小学校4年生の時です。母子家庭で、主訴はネグレクト。食事のままならない時には学校先生から給食を多めにもらっていたそうです。勉学が好きで、野球部にも所属し、施設での暮らしの中でのびのび生活し成長していきました。

A さんが『GS 進学支援プロジェクト』を申請したのは、高校3年の時です。教師を目指していたので大学進学は必須でした。高校生になってからアルバイトも頑張り、コツコツ進学資金を貯めてはいましたが、最初は金銭的な問題から国公立を目指していました。本プロジェクトに合格が決まってからは私立を志望し、塾にも通い始めることができました。

大学進学とともに退所した A さんは、大学からは少し遠い、施設の近くで一人暮らしをはじめました。本奨学金では定期代も受け取れたことも大きかったようです。本人も私も近くにいることの安心感は大きく、毎月の面談とともに、見守り的な意味合いもあり、しばらくは施設の子たちへの学習ボランティアをしてもらいました。

生活に慣れた3年次には大学近くに引っ越しをしました。4 年生となり教育実習の期間は施設に寝泊まりしてもらい、実習に集中できるよう、家事を請け負い、愚痴や弱音を吐露できる環境を作って、健康面とメンタル面のケアをしました。

とはいうものの、A さん自身は持っている力を十分発揮し、学業、アルバイト、サークル活動と両立させ、大学生生活継続できていました。ただ、就職活動で芳しくない結果が出た時は、NPO 法人ブリッジフォースマイルにつなぎ、相談したことで、いろいろなアドバイスや対策をいただき、就職できました。現在の A さんは公立中学校で社会科を教えています。

■D さんのケース

D さん(女性)は中学2年で施設に来ました。先に弟が入所しており、心理的虐待と聞いていたのですが、後に身体的虐待も発覚しました。

とても聡明な優しい子で、子どもへの対応がうまく、小さい子たちの面倒をよく見てくれました。その流れでしょうか、いつからか保育士を目指すようになり、大学への進学を希望して『GS 進学支援プロジェクト』への申請を行いました。

志望校に入学し、キャンパスライフの前半はスムーズでした。毎月の面談でも状況把握とケアとがうまくできていたように思います。しかし、3年になってしばらくした頃、本人からヘルプの連絡が入りました。駆け付けると精神的に非常に不安定な状態で、一人暮らしができる状況になかったため、すぐ施設で休養させることにしました。その後しばらく入院することになりました。後日判明したことは、前回の面談後から母親との距離が縮まり、トラウマを再発して不安定になったようです。

結果、退院後は母親との距離感を模索しながら、母宅と、一人暮らしのアパートを上手に使い、それでも大変な時には施設へ泊りに来てても良いこととし、毎月の面談以外にも逐一連絡を取り合ってゆっくり進めていくことになりました。

Dさんは、そのまま大学を無事卒業して、念願の保育士として就職。独り立ちをして安心していましたが、1年もたずに退職してしまいました。どうやら日々園児たちの相手をし、母子関係を目の当たりにする中で、トラウマが再発してしまったようです。しばらく様子をみながら養生し、その間も大学の時と同じように連絡を取り合いながら、必要に応じて面談をしサポートしました。現在は自分にあった働き方のペースを徐々につかみ、非常勤として保育園で働いています。

■本プロジェクトへの感謝

以上、2つのケースをご紹介しましたが、『GS 進学支援プロジェクト』では、支援が高校3年からはじまった点は、とてもありがたかったです。大学に進学するにあたって経済的な心配がなく勉強に打ち込めるだけでも大きなメリットですが、加えて、高校3年時の塾代の費用も出たため、金銭的なことは抜きに受験に集中でき、大学へ挑戦できる環境は子どもたちの大きな支えになりました。

また、担当職員とTVACケースワーカーによる毎月の面談があったことで、奨学生の現状を把握しやすかったのも良かったです。特にDさんの場合は、毎月会っていたことが「いざという時に頼れる関係」の保持へとつながり、入院直前のヘルプになったのだと思います。もし連絡をしても電話に出ない、折り返しがない、会おうとしてくれない場合は、奨学生が今危うい状況にある可能性が高い、という判断もできます。面談は毎月なので、最長でも1か月という比較的短期間で対策を開始できるのは、大きな利点でしょう。

今でも覚えているのは、奨学生たちへのお祝いの会の席で、大学時代にはその時にしかできないことをたくさん経験し、楽しんでほしいと励まされたことです。Dさんはコロナの影響で思い描いた生活ではなかったかもしれませんが、ふたりとも本プロジェクトのおかげで生活が支えられ、他の学生と同じようにキャンパスライフを謳歌できたと思います。本当に感謝しています。

■公的支援制度の課題

さて、現在、大学等の学費については返済の必要がない給付型奨学金や学費免除制度などが公的な支援として整いはじめています。進学しやすくなった反面で、中退する子が増えている現状があります。「夢を実現するために、奨学金で頑張る」という目的意識ではなく、「みんなが行くから」で進学する。だから、簡単に辞めてしまうのではないのでしょうか。それも本人の選択なのですが、できれば卒業してもらいたいのが本心です。

では、どうすればよいかと問われると、施設にいううちに将来の目標探しができるように配慮する以外は今のところ思いつきません。就職した子たちでも長続きしないケースは増えており、「どうせ続かないから働かない」とあきらめてしまう子もいます。やはり施設にいううちに就労体験、頑張れたという成功体験が必要なのかもしれません。

もうひとつ。リービングケアからアフターケアまでの連続した支援の充実が必要と考えています。現在は18歳の施設退所時に、ほぼすべての支援が打ち切られます。近年は居住費が出せるよう、また措置延長して施設で生活できるようにもなりました。非常にありがたく、とても大きな一歩です。一方で、退所後の慣れない一人暮らしや家族との距離感で心身を壊した場合、十分生活できる給料も貯蓄もない状態での医療費等の大きな出費となり、すぐ行き詰ってしまうケースがあ

ります。できれば数か月かけて徐々に支援を減らす、あるいは緊急時に一時金を支給したり、心理面接を受けられるようにするなど、生活を軌道に乗せやすい制度設計が必要ではないかと思っています。

2024年3月24日 オンライン・インタビュー

3) 奨学生 B さん ～人を喜ばせたい！その気持ちが形になっていく～

B さん、20代女性。2024年3月大学を卒業。母子生活支援施設に入所時に東京ボランティア・市民活動センター(TVAC)がゴールドマン・サックス社からの寄付によって実施する奨学金プロジェクト(『GS 進学支援プロジェクト』)に応募し、支援が決定。大学でマーケティングを学び、広告会社に就職した。

■マーケティングを学びたい

私が母子支援施設に入ったのは、中学2年のときです。とてもつらい生活が続いていましたが、母と弟と3人で施設を頼って皆さんに助けてもらったことで前途が開けるようでした。通常は2年ほどで退去するのだそうですが、私たちの生活がなかなか安定しなかったため、延長措置を認めていただけたことには、本当に感謝しています。

私はそんな生活の中で、いつの間にか「人を喜ばせたい」と思うようになりました。誰かを観察して、分析して、驚いて笑顔になるようなこと、アイデアを形にして笑ってもらうこと、そういうことがしたいと考えはじめたのです。当時は漠然としており、ただ「笑顔が嬉しい」と感じる程度でしたが、高校へ進学し、進路を考える段階になって初めてその気持ちを進路指導の先生に相談してみました。

「それはきっとマーケティングの仕事だね」

そう言われて、ようやく自分の目標が具体的な形を取り始めました。

でも、マーケティングを学ぶには大学に行かなければなりません。施設の方に相談したところ、ゴールドマン・サックスの奨学金を教えてください、申請。高校3年から塾代を受理できることになりました。あの時は本当に嬉しかったです。

同時に、進学先としていろいろな大学を調べ始めました。マーケティングは経営学部などでも学べますが、私はもっと専門的に学びたいという思いが強く、オープンキャンパスなどで機会があると体験講義を受けたりしながら、大学を選びました。

■十分に楽しめた大学生活

大学には推薦で合格。高校3年の冬に家族とともに施設を出て、アルバイトをしながらの大学生活が始まりました。しかし世の中はコロナ禍となり、憧れのキャンパスライフとはかけ離れた状態になっていましたが、それでも活動するサークルがチラホラあり、私もいくつか見学をして、ダンスサークルに入ることにしました。

高校時代はダンス部に所属して厳しい練習を重ねていたもので、「ダンスは見るだけでいいや」と思いながら見学へ。でも、いざ目の前で見るとやっぱり楽しそうで「やりたい！」と。でも、基本的には自由参加で、やりたいダンスがあればそれをやってよいというスタンスだったので、負担を感じる場面は少なかったと思います。大学生ならではの深夜練習にも参加しつつ、結局4年次3月の卒業公演のステージに上がるまで、自分のペースで目一杯楽しめました。今はサークルを引退してしまい、ちょっと名残惜しいです。

大学は、2年目から通常の対面授業になりました。特に嬉しかったのは、一番人気のゼミに入れたことでしょうか。そのゼミはやはりマーケティングのゼミで、4人チームで研究して発表して、という活動をします。自分ではしっかりこなしていたつもりでしたが、チームですから、いろんな人

がいて、苦い思いもしました。それでも知識やプレゼンテーション力、グループワーク力、責任感、リーダー力など、たくさん学べたと思います。

大切な友達ができたことも大収穫でした。その友達はとても活動的な人で、「本当に同い年？」と思うほどいろいろな経験をしており、私の知らない世界をたくさん教えてもらいました。いつもその人から刺激をもらい、「私も！」と前向きになれる心強い友達です。

■悩みに悩んだ就職先

3年次の夏。インターンへのエントリーを始めました。その時は食品や化粧品の手先しか応募しておらず、エントリーしても落ちてばかりでした。9月になってようやく広告代理店が募集をはじめ、私もベンチャーの広告代理店の長期インターンが決まりました。そこでいろいろな業務を実践していくなかで感じたのは、「自分のやりたいことってズバリ広告でできるんだ！」という確信と、「この仕事をやっていきたい！」という熱意です。そこからの就職活動では、広告業界にエントリーする割合を一気に増やしました。

就活は、インターンを含めると約 1 年と長期にわたりました。しんどいこともありましたが、いただいた内定の中から、最終的に食品業界の有名企業とインターン先とは別の広告代理店の 2 社に絞りました。その2社で過去にないほど悩みました。食品会社は誰もが知る会社で、女性が女性らしく働けて安定した収入になる。直接マーケティングの部署はないけれど、やがては企画開発で働けるかもしれない。広告代理店は激務で残業もかなりあるけど、女性でもバリバリ働けて、私が目標とするマーケティングに直結する仕事。

お世話になっていた施設職員の方や TVAC のケースワーカーの方、友達、母、いろいろな人に相談しました。母はやはり親ですから、「誰もが知る企業で安定した方がいい」と思っていたそうです。それでも自分で大学を選び、サークルもアルバイトも友達関係もきちんと意志をもって動いていた、就活も自分で考えて内定を出してきた、と私を見ていてくれたからこそ、最後は「自分の気持ちにしたがって」と言ってくれました。

この春からは、晴れて広告代理店社員になります。

■心強い味方になってくれて、感謝しかない

私がこうして大学を卒業し、目指す仕事へ就職できたのは、『GS 進学支援プロジェクト』の奨学金で経済面で支えてくださった皆様、私たち家族を見守り心身をしっかりと支えてくださった施設職員さんやケースワーカーさん、私たちに関わってくださった皆様のおかげです。本当に、ほんとうにありがとうございました。今振り返っても感謝しかありません。

私たち家族が引っ越して施設に入り、学校も転校して知らない人ばかりの中に入り、不安だけしかない生活で「もう、お先真っ暗だ！」と絶望しかけた時、支えてくれたのは間違いなく皆さんです。施設に入ることができた、措置延長してでも見守ってくれた、奨学金を受け取れた、心身を支えてくれた、悩みをサポートしてくれた……あの時々感じた頼れる存在が近くにいることへの安心感と心強さは何にも代えられません。皆さんがいたから、「私は大丈夫！」と揺るぎない自信をもってここまで歩いてこられました。

毎月面談をしていていたケースワーカーの方には、ずっといろいろな話をしました。それこそ、私のことで知らないことはないと思います。私は意志が弱くて、背中を押してようやく動き出せる、まっとうできるという場面ばかりだったと思います。それでも「こんなところも素敵だよ」「あなたのこういうところが本当にいいなと思ったよ」と私を肯定して、言葉にして伝えてくれたおかげで、自

分の内面に気づけました。自信を持って「就活でよい面をもっと出していきたい、伝えたい」と思うことができました。

ほんとうにありがとうございました。私たちと同じように苦しんでいる皆さんのうしろにも、きっと頼れる存在がいるはずです。それを忘れないでください。

2024年3月29日 オンライン・インタビュー

4) 奨学生 B さんの担当職員 ～限られた入所期間中にできるだけの支援を！～

母子生活支援施設の母子支援員。施設では大学進学を、学生と母親と連絡をとりながら支援した。

■本人の不安を少しでも解消し、前向きになれる手助けをする

母子生活支援施設では、自立のための支援が必要な母子家庭の支援や DV 被害から逃れる緊急一時保護の事業を行っています。利用期間 2 年での自立を目指して支援を行います。

私が担当したのは、中学 3 年で母親とともに入所した B さん(前述)です。B さんはとても人懐っこく、まわりに頼るのが上手な子でした。翌年、高校へ進学して通いはじめ、高校卒業後の進路も先生としっかり話していたようです。その際に自分の好きな分野がマーケティングだと知り、マーケティングを専門的に学べる大学を探して、志望していました。

大学は『GS 進学支援プロジェクト』の奨学金を受けて入学しました。しかしコロナの影響によりリモート授業がほとんどで、それまで想像していたキャンパスライフとの差を感じ、戸惑っていました。2 年目に待望の対面授業がはじまりましたが、今度はインドア中心の生活からの急激な環境の変化で困惑したそうです。それでもダンスサークルに入って活動を続け、いろいろなアルバイトをこなしながら日々を謳歌していたようです。やがて、マーケティングへの興味から広告代理店でのインターンシップをはじめ、好きな事柄と向き合う生活に充実感を見出していたそうです。

今振り返ってみると、定期的な面談以外にも不安や困ったことがあれば、私たち職員や TVAC のケースワーカー、あるいは母親に相談し、それぞれの意見を B さんなりにきちんと受け止め消化していたことで、前向きに過ごせていたのではないかと思います。

就職活動では、複数社から内定をいただくほどでしたが、B さんは強い興味から学び続けたマーケティングを活かせる広告代理店にするか、部署によってはマーケティングと無関係になるかもしれないが食品業界の有名企業での安定を取るかで、長いこと悩んでいました。私たちだけでなく、ゼミの先生や友達にも相談していたそうです。母親は「激務といわれる広告代理店よりも、有名企業に就職して安定してほしい」と話していましたが、結局 B さんは興味のあった広告代理店を選びました。

■親子関係は少なからず支援にも影響してくる

奨学金の受給中は、毎月の面談で近況を聞くだけでなく、大学の履修や手続きについてなど、具体的な物事に対する相談を受けることも多かったです。しかし学年が上がるにつれて要領をつかんだようで、自分一人でこなせるようになりました。ですから、大学生活の後半は実務的な相談はほとんどなく、その時に抱えている悩みをいろいろ聞いてアドバイスするような状態でした。

B さんの場合、困ったことがあると一人で解決しようとするよりも「どうしよう」と素直に連絡をくれるタイプだったので、状況確認の面ではあまり苦労しませんでした。ただ、時折連絡が取れないこともあったので、その時はかなり心配をしました。たいていは忙しくて連絡を返す暇もなかったのですが、どうしても連絡を取りたいときには母親につないでもらっていました。

それは母子関係が非常に良好だったからこそできたことです。母子が非常に協力的で、支援する側としてはとてもプラスでした。これまでに経験した他の利用者をみると、やはり親子関係がうまくいっていないケースは少なからずあります。子どもへの影響も大きくなりがちで、心身が不安定だったり、進学や就職をしても続けられなかったりするケースがよくありました。B さんがスム

ーズに大学進学や就職活動を行えたのは、Bさん本人の意思と母親からのサポート、力添えあってこそだったのでしょう。親の影響から自分の望むもの以外の道へ進み、挫折してしまうケースや、幼少期の生活に起因するメンタル不調が残っていて、心身に不調をきたしたケースを考えると、非常にうまくいったのではないかと思います。

■『GS 進学支援プロジェクト』に資金面以外でも助けてもらった

本プロジェクトの奨学金の最大の利点は、高校3年から5年間サポートが受けられることだと思います。Bさんは、基本的には国から給付される奨学金を活用しつつ、足りない部分を本プロジェクトの奨学金で補う形でした。

当施設は、利用期間が2年と限られています。そのなかで受験や進学、就職活動などのタイミングで施設にいる子はそれほど多くなく、今回のBさんのように進学や就職の話をするケースはあまりありません。そのため私たちだけでは、進学先の特徴や就職先の環境などの情報の提供が十分ではないこともあります。したがって、今回TVACのケースワーカーさんがずっと連携してくださったことで非常に助かった面が多々ありました。特にBさんの成人式の準備に関しては、NPOの方をご紹介いただき、協力を得られたのが大きな収穫でした。Bさん以降も、そのNPOさんにはお世話になっています。

■人員不足によりアフターケアが難しい

私のこれまでの経験では、高校卒業後に専門学校を希望する子もいますが、4年制大学への進学を希望する子が、以前に比べ随分と増えてきました。もちろん、就職を選ぶ子もいます。どちらへ進むにしても、中学や高校を卒業する時点である程度自分の進路を定めて、それに近いところへ進んだ子はどううまくいっているパターンが多いと感じています。逆に進路や将来について具体的に考えていない子は、挫折や苦労を経験するケースが多い印象です。具体的なケースとしては、中学卒業時に進学先や就職先を決めずに家から出られず、引きこもりになってしまった子や、親の強い意向にしたがって自分の望む進路へ進めず、最終的に辞めてしまう子などがいました。それでもフリーターとして暮らしている子もいますが、明確な目標や将来像を描けず、生活費のためにとりあえず働いている状態の子が散見されます。

なかには、退所後に生活に困ってしまうケースもありました。在所時は職員が親子を支えるので何とかなるのですが、退所後は会う機会も少なくなり、助けてあげたくてもなかなか親身に寄り添うのは難しい場合もあり、もどかしさを感じます。

今後、母子生活支援施設にはアフターケアを担う自立支援担当職員を配置し、退所前後の支援により力を入れていくという国の方針がありますので、一層自立に向けた支援の充実を図ることが見込まれます。

2024年3月24日 オンライン・インタビュー

5) 奨学生 C さんの担当職員

～ アセスメントの重要性の再認識とアフターケアの重要性、
さらに継続的な自立支援へ ～

児童養護施設の自立支援担当職員。担当した『GS 進学支援プロジェクト』の奨学生 C さんは4年次後期まで在学したが、履修単位不足で卒業できなかった。その後連絡がつかなくなり、別の貸与奨学金の返済手続きにも応じなかったが、数年経ってその貸与奨学金の返済手続きに応じ、現在は担当職員ともつながりを保っている。

■アフターケアの重要性

私は児童指導員として7年、自立支援担当職員として12年子どもたちと関わってきました。一昔前に比べれば奨学金の充実や支援機関の増加など子どもたちの自立をサポートする体制が整ってきているのは喜ばしいことです。しかし、高校卒業後 18 歳そこそこで施設を巣立っていくのは制度的に無理があると考えており、自立支援は手厚いアフターケアを前提として考えるべきだと思っています。一般家庭の子たちにも言えるのですが、高校卒業の年齢で自活・自立の準備ができている子などほとんどいないと思います。

■大学2年次から急ブレーキ

C さん(男性)が施設へ来たのは、小学4年生でした。父子家庭で姉と3人暮らし。父親の就労が不安定だったり、家事育児に手が回らなかったりしていたようで、姉と共に当施設へ入所となりました。

C さんは元来健康的で社会性もある子で、施設入所後は本来の生活習慣を取り戻して順調に施設生活・学校生活を送っていました。友人も多く、スポーツもできて、勉強にも熱心に取り組み高校は進学校へ進みました。

高校からバンド活動に熱中し始め、反面勉学がおろそかになってしまいましたが、医療スポーツ系の大学に進学。ゴールドマン・サックス社の奨学金を受け、自立生活を始めました。

大学では学業のほかにアルバイトや軽音楽サークルに精を出し、一年次はとても順調に単位を修得できていました。順調に大学生活のスタートを切れ、こちらも安心していました。

ところが2年次に入り、単位取得が急ブレーキ。定期的な面談では自分の置かれた状況は理解できており、「ちゃんとやります」と口にしていたので、その言葉を信じ、もう少し様子を見ることになりました。3年次に学業は少し持ち直したものの、卒業の可否は4年次にもつれ込むことになりました。

■4年次は卒業のための全面的支援

4年次に入るにあたりアルバイトを含めた生活状況全般を見直し、奨学金の収支を厳しく管理する、課題やレポートは施設の学習担当の職員の指導を受ける、毎朝モーニングコールをおこなう、大学の教務課と密に連絡を取り授業の出席状況を細かくチェックする等、できる限りの支援をしたのですが、本人は最後まで何かと言い訳をしたりごまかしたりしてやり過ぎそうとし、結局、単位修得不足で卒業不可となりました。

三年次の途中に施設長を含めて面談をおこなった際、彼は「大学へ進学する際の気持ち甘かったことを後悔している。でも、自分がやると言ったので責任はあるが、自分は周りの子と違って人一倍頑張らなければならず、学校へ行くのがつらい」と、涙ながらに話していました。

■その後の奨学生とのつながり

大学中退後は連絡を入れても返事がない期間が続きました。聞くところによると、飲酒店のボーイとして働き、そこに客として来ていた地元の建設企業の社長さんと親しくなり、誘われてその会社へ入社したのだそう。

私が最後に彼に直接会ったのは5～6年前で、彼の姉の結婚式でのことでした。それからしばらくして私に会いに突然施設へ来たことがあったそうですが、その時私は不在だったので会っていません。すぐに連絡を入れてみると、つながり、調子の良さそうな口ぶりで「施設の子で就職先に困っている子がいたら、うちでよければ紹介するよ」と言っていました。

■アフターケア強化のための施設の取り組みと今後の自立支援の展望

この事例が私や施設のアフターケアの取り組みや考え方を見直す契機となりました。たとえば、奨学金の管理です。退所者本人が奨学金を含む多額の収支管理をおこなうのはとても大変なので、本人と修学資金管理委託契約を交わして施設で大口の口座(通帳)を預かるようにしました。

また、進学先の大学等との連携も今まで以上に意識し、何かあれば保護者代わりとして間に入り、大学等とのやり取りをするようにしています。最近では各学校が学生の出欠状況や成績管理等をおこなうシステムができており、保護者もオンラインでそれらを確認することができるようになっています。

アフターケアにおいては施設入所中の支援と同様に、本人との関係性が物を言います。要するに入所中からの関係性の構築が最も肝要です。また、アフターケアにおいて退所者本人から発信があった場合に、できるだけタイムリーに、心をもって対応することで退所者にとっても“施設を出てからも遠慮なく相談して良いんだ”と思ってもらうことができ、こちらとしても本人とつながることで状況把握ができ、サポートもしやすくなります。

近年では高校卒業後の措置延長やその後のさらなる支援の継続制度や取り組みが広がってきています。施設退所前の自立準備期間を十分に取ること、そして施設退所後の手厚いアフターケアの両輪が肝要になってきます。

2024年3月24日 オンライン・インタビュー

6) TVAC ケースワーカーの取り組み

ケースワーカー 脇田恵、今井美之

■子どもたちや施設職員との関係づくり

2010年から始まった『進学支援プロジェクト』の大学支援事業にケースワーカーとして関わった、この15年間で振り返ってみたいと思います。

まず、本プロジェクトは4年制大学の入学から卒業までの学費と生活費を奨学金として支援し、かつ、大学受験時からケースワーカーと施設の担当職員が伴走するという、それまでに例のないプロジェクトでした。支援期間が高校3年生から4年制大学卒業までの5年間で、特定のお子さんと長く繋がる、イコール、施設の担当職員とも同じだけ長くご協力いただきました。

開始当初は、まだ知られていないプロジェクトだったので、私たちケースワーカーが施設に出入りすることに違和感を覚える施設の方々もいたのではないのでしょうか。私たちも奨学生のために必要な支援や、職員さんとどのように連携することが最善なのかを必死に考えました。

当初はまだ4年制大学への進学者がごく一部の時代だったので、私たちケースワーカーは、施設がまだあまり支援の経験のない領域、具体的には、受験大学の選定方法のアドバイス(大手塾の方にノウハウや選び方を教えていただき三者面談も行いました)、オープンキャンパスへ同伴し、学生本人の興味や関心を引き出す等、学生本人が自分で大学を選ぶような機会を提供しました。また、受験勉強中の不安や体調の変化に気づいたら、すぐに施設の担当職員と共有しました。また、受験の戦略を学生と一緒に考えたり、受験当日は緊張を和らげて、120%の実力を出してもらうようにも努めました。

■施設から大学での一人暮らしへの移行

大学に入学後、奨学生はそれぞれが念願の一人暮らしを楽しんでおり、毎年、微笑ましい情景に出会えました。お部屋を自分の好きなようにレイアウトし、「推し」のグッズを飾る子、生活しやすい機能性を考えてシンプルな生活をする子、週末に食事の作り置きを行い、大学にお弁当を持参するしっかり者さん、そして、毎日、新しいレシピに挑戦するチャレンジャーもいました。

一方で、賑やかな施設の生活から一人暮らしになり、寂しさを抱えて、アルバイトやサークルに没頭する子、自立生活と勉強の両立、アルバイトと学業のバランスに苦勞をする子も一定数見受けられました。そんな時は、施設の担当職員が学生の生活面(主に金銭管理や生活状況等)を、私たちケースワーカーが学業面(主に授業への取り組み、単位・成績の状況、サークルや交友関係等)と分けて対応し、情報共有することで、ドロップアウトをしないように両輪でサポートを続けてきました。

また、プロジェクトの初期段階では、児童福祉施設のお子さんの事情や背景を知らない大学関係者が多かったため、施設の担当職員と一緒に大学の学生課や学年主任の先生に本プロジェクトの主旨を伝えながら協力をお願いし、授業の履修や単位について確認したり、卒業や就職についての情報をいただき、スムーズに進級・卒業するために奔走しました。また、こうした支援の取り

組みは、年に2回開催される施設の担当職員連絡会で、先輩職員から次の世代の職員にも引き継がれていきました。

入学式、成人式、卒業式という、人生で特別な日には、施設に挨拶にいく学生が多かったと記憶しています。そんな人生の門出に振袖や袴の貸与と着付け、ヘアメイクを一手に引き受けてくれる NPO とつなぎ、人生で一度きりの記念日を盛大にお祝いしてもらいました。この時の学生のキラキラした笑顔は今も忘れられません。

奨学金は施設に管理していただき、定期的または必要に応じて渡してもらいました。上手に金銭管理をするお子さんがいる反面、大きな額のお金を一度に手にすることで、使い方を誤ってしまったり、初めてのクレジットカードの利用で、思いもよらぬ大きな金額の請求が来てしまい、その後の対応に追われたりすることもありました。私たちケースワーカーは施設の担当職員と一緒に対処方法を考え、職員の目がなかなか届かないキャッシュレス決済の問題については、お金にまつわる知識やカード破産の危険性を学ぶマネー講座を開催し、奨学生に理解を深めてもらいました。

支援者たちは奨学生には大学で専門性を身に付けて社会に巣立って欲しいという願いがありました。卒業生は動物看護師、教員、保育士、管理栄養士、看護師、社会福祉士などを取得し、その資格を活かして就職した学生が多いです。他方で、サークルやアルバイト・インターンシップなどで、仲間を作り、自分の新たな興味・関心や強みを見つけて、卒業後の進路を選択した人もいました。大学生活全般が彼らにとって、社会に羽ばたく前の準備段階になっていたと感じています。

■GS 社の役員・社員によるキャリア・メンタリング

年に1度のキャリア・メンタリングでは、ゴールドマン・サックス社のオフィスを訪れ、役員・社員の方々とグループまたはペアになり、卒業後のキャリアを考えるワークや、「人生の先輩」の経験を伺い、今後の自分の未来を考えるきっかけをいただきました。実際に多くの就活生と面接をしている役員の方々との模擬面接を経験した奨学生は、就労面接の本番で自信をもって、自らの強みを伝えることが出来たようです。加えて、社員の方々より、今後の社会経済の動向や、成長業界などを伺うことで、時代のニーズにマッチした業界へ就職した学生もいます。

また、卒業後に仕事を辞めたり、仕事をしない期間が長くなる人もいますが、学生から連絡が来た時にはご飯を食べながら話を聞いたり、施設にも情報を共有しました。

■コロナ禍ではオンラインでつながる

コロナ禍で生活様式が大きく変わり、施設の担当職員も私たちも奨学生と直接会うことが出来ませんでした。オンラインやメール、SNS で連絡をとったり、また、なかなか連絡がつかない場合は、施設が奨学生の同期の卒園生から情報を得て、子どもが孤立しないように、様々な方法で繋がろうとしました。施設を出た後に、子どもたちが社会や環境の変化に対応できるように、たくさんの方々の見守りが必要であることを実感しています。私たちの関わりもその一つとしての役割を果たせたのであれば幸甚です。

